



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2010/01/15(金)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 65

2009年 大学バスケットボールの反省

指導者育成委員 倉島 武徳

北海道における大学の水準は、男女とも底上げはされてきているが、1部に所属しているチームは、全国レベルを考えたときに相当なレベル低下がみられる。因みに全国大会に行っても、殆ど相手にされない状態のゲームしか展開できないのである。このことは後に述べるとして、2部のチームは健闘したと評価できる。今年度は入れ替戦も各部残留と昇格をめぐって、相当に激しいゲームが行われた。男子では1部の7・8位が2部に降格し、2部の1・2位が昇格した。女子は1チームが残留し、1チームが降格した。また、女子の1部では昇格したばかりの武蔵女子短大は、1戦1戦上手になるのが手に取るように分かり、長足の進歩をした。

このことを別の観点で見ると、指導者がいるかいないかが関わっていると見られる。女子の場合、1位から6位までは指導者が付いているチームであり、7・8位は学生がチームを率いていたことが一因と考えられる。勿論、指導者だけの問題ではなく、選手自体の資質も問題があるのだろう。しかし、もうそろそろ指導者が果たすべき役割があることを、各大学は認識すべきである。

一方、男子は必ずしも指導者の問題ではないように思われる。すなわち、北大・旭川教育大等は学生がコーチをしているチームであるが、北大はよく頑張

って4位に入っている。旭川教育大は選手の資質は必ずしも悪いわけではないので、やはりコーチングに問題があったのだろう。

3部以下は、男女とも選手と指導者に恵まれず、学生生活とバスケットボールの両立に苦勞をしているようである。従って、次第にレベルの差が大きく広がってきているように思われる。

今年のインカレは男女別開催となり、その両方を観戦することは大変な労力と費用が必要であった。以下、インカレの感想を述べたい。

女子は、筑波大学が久しぶりに優勝したが、山の手高校出身の大鷹・福士がおおいに貢献した。全体的には、激しく相手に密着したディフェンスと素早いトランジッションのできるチームが、上位に進出している。さらにインサイドとアウトサイドのコンビネーション、3ポイントシュートの正確さ、リバウンドへの飽くなき努力、緊張した中での正しい判断力を発揮するメンタルタフネスなどができなければ、インカレで戦うレベルではないと言えるだろう。

このような観点から、本道の北翔大・札幌大は問題が多すぎると言わざるを得ない。短時間であればゲームになるものの、1ゲームを通じてこれらの力を発揮できていないのが実情である。この力をつけるのは容易ではないが、他地区の大学の中では、このことを克服しているチームがあることに心してほしい。

一方の男子も同様のことが言える。上記の要件の他に、選手のサイズの問題もある。女子にサイズの問題がないわけではないが、男子の場合はさらにその影響が大きくなっていると見られる。従って、身体的なハンディをさらに克服するには、技術面・メンタル面で勝っていなければ、ゲームは成立しない。残念ながら札幌大・北海学園大ともに力及ばずであった。

このように見てくると、選手の資質が大切であるとともに、指導者の責任が

痛感させられる。北海道の大学は、指導者がいないのが当たり前のように思っている節があるが、指導者は必ずしもその大学の教員であったり、職員であったりする必要はない。本当にバスケットボールが好きで、勉強し、研究する意欲を持った人であれば、その成果は必ず現れるであろう。今までが遊び半分で行っていたわけではないであろうが、これからはチームづくりと人づくりに責任を持ってもらいたい。また、そのような指導者を養成しなければならない。

最後に、北海道の大学女子の中で、常に優勝に絡んで上位4チームが切磋琢磨してきた函館大が、今シーズンを最後に、チームを解散しなければならなくなったのは、まことに大きな損失である。これまでに本道に貢献してきたことを思うと、大変な財産を失うことになる。ご苦労様でした。残されたチームの奮起を期待し筆を置く。

HBA（北海道バスケットボール協会）指導者育成専門委員会